

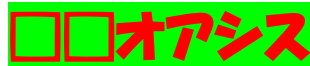
「肝心閑話」

校訓：自主 責任 奉仕 協力

(文責：校長)

確かな学力を持ち、健康で人間性豊かな生徒

基礎学力 思いやりの心・たくましい体 豊かな人間性 主体的な生活設計 郷土を愛し、郷土に生きる力



「おはようございます。」「ありがとうございます。」「しあわせだなあ。」「すみません。」

真珠湾攻撃「トラトラトラ」の真実

1941(昭和16)年12月8日午前3時19分(現地時間7日午前7時49分)、旧日本軍の空母6隻と航空機約350機などからなる機動部隊がハワイ・オアフ島・真珠湾の米軍基地を奇襲攻撃しました。米側は軍艦6隻(11隻という説も)が撃沈し、400機近くの航空機が破壊され、約2400人が犠牲となりました。攻撃の成功を告げる「トラトラトラ」という暗号文が打電され、3年6ヶ月に及ぶ大東亜戦争対米英戦(太平洋戦争)が勃発。米軍は“Remember pearl harbor”を戦争遂行の合言葉とし、「だまし討ちをした日本は残虐な悪い国だから、アメリカは日本の戦争をストップさせるために、日本の主要都市の焼尽と二度の原子爆弾投下をした」・・・戦後、私たち日本人は、小さい頃から繰り返し教わってきたことでした。「教え子を戦争に行かせるな」のスローガンのもと、活動してきた日教組も、同じような立場だったと思います。

しかし、戦後76年がたって、いろいろと違う解釈が世に出てきています。国際政治学者の藤井厳喜氏が、講演録『太平洋戦争の大嘘』という本を発行していますが、その中で、1946年5月3日に東京で行われた元アメリカ大統領ハーバート・フーヴァーと連合軍最高司令官マッカーサーとの「太平洋戦争とは、一体何だったのか」に関する3日間にも渡るディスカッションの記録が紹介されています。

本当の歴史がその時の為政者によって捻じ曲げられて伝わっていくのは、過去の歴史が示す通りです。

最近では、「日本は江戸時代、鎖国をしていなかった」とか、そもそも「江戸時代に士農工商という制度はなかった」と言われ出したりしています。武家による政治が始まったとされる、鎌倉幕府が開かれたのは、「いい国(1192)作ろう」と覚えたのは間違いで、今は1185年となっていますし、「蒸し米(645)で祝おう」と覚えた「大化の改新」も実は646年に書き直されています。高校の教科書からは「聖徳太子」の名前すら消え、「厩戸王(うまやどおう)」になっています。NHK大河ドラマ『麒麟がくる』のお陰で、謀反を起こした日本最大の裏切り者だった明智光秀は立派な討伐者という認識に代わりつつありますし、『生類憐みの令』を出した江戸幕府5代将軍綱吉は「バカ殿」だと教わってきましたが、現在の教科書では「綱吉は仏教に帰依し、『生類憐みの令』を出して殺生を禁じた。これにより、野犬が横行する殺伐とした状態は消え、神道の影響から、死や血を忌み嫌う風習を作り出し、戦国時代以来の相手を殺傷する価値観は否定された」と賞賛されています。

「教科書に書いているから」というだけで生徒に歴史や政治的な見解を教えるのは、大変危険なことだと思います。特にアメリカとの戦争については、戦後、真実から随分とねじ曲げられたことが教え込まれてきたという感じがします。

先日、神出小学校6年生が修学旅行で広島の平和記念館に行っていました。私も広島には毎年行っていますが、一昨年から戦後75年の真実を伝えるということで展示品が一変していました。つい最近まで、原水爆反対や平和協調路線の展示が多かったのですが、戦争の悲惨さをストレートに伝えようとする展示に変わって(戻って)いました。

国際ロータリー会長のハーバート・J・テイラーが提唱した“THE FOUR-WAY TEST”(四つのテスト)・・・

①真実かどうか。②みんなに公平か。③好意と友情を深めるか。④みんなのためになるかどうか。に照らし合わせて、私たちは真実を教える教育をしたいものです。

「先生すべってる！」



先日、日曜日の午後、教え子の K 子（50 歳）からメールが届きました。

“先生すべってる”・・・何のことかわからないまま、無視していましたが、それから一日中、頭の中からその言葉が離れません。なにか、私が「すべる」ような発言をしたらどうか？ それとも、K 子か、もしくは K 子のお子さん（中学 3 年生）が入試か何かのテストで落ちたのだろうか？・・・結局、翌日電話しました。そうしたら、「スキー場がオープンしたので、家族でスキーを滑っていた。」ということでした。

メールってのは、便利なようで意思疎通ができない時もありますね。

以前、生徒同士でこんなトラブルがありました。

同じクラス的女子 5 人グループがいて、A 子の家でパーティをすることになりました。ところが、B 子はそのパーティをすると決めた時にいなかったのので、A 子にメールを送ってパーティの日時の確認をしました。そうしたら、A 子からの返信メールには、「**なんで来るん？**」と書いてありました。

そのメールを受け取った B 子は、「自分はハミゴにされている。パーティには呼ばれていないんだ。」と解釈してしまい、そのことが原因で不登校になってしまったのです。

一方、A 子は、何のことかさっぱりわかりません。そう、A 子は B 子に、自転車で来るのか、バスで来るのかを聞いただけのつもりだったのです。「なんで来るん？」というメールを、来てはいけないという迷惑だと思った B 子と、来る方法を尋ねただけの A 子。二人が誤解を解くまで、なんと 1 年近くもかかりました。

メールは便利ですが、コミュニケーションの方法として万能ではありません。こんな具体的な話で、生徒たちにも、メールの難しさを教えてあげてください。

「クッション言葉」

最近、様々な場面でメールを送ることが多くなりましたが、「余分な言葉を書かずに、端的に用件を示そう」という風潮が強くなってきているように感じます。手紙では、最初に時候の挨拶を書くにも気を使いますが、メールの冒頭に、「清和の候、貴殿にはますます御清栄のこととお慶び申し上げます。」などとは書きませんね。

しかし、相手に対して「お願い・依頼」「反論・反対意見」「拒否」する場合などに、いきなり用件を言うと、嫌味や冷たい印象となることも少なくありません。そんな時、言葉の前に「クッション言葉」をつけると、印象が異なります。

たとえば...

「**お手数をおかけしますが**、ここにサインをいただけますでしょうか？」

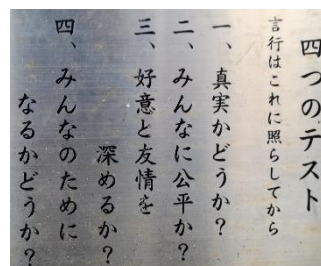
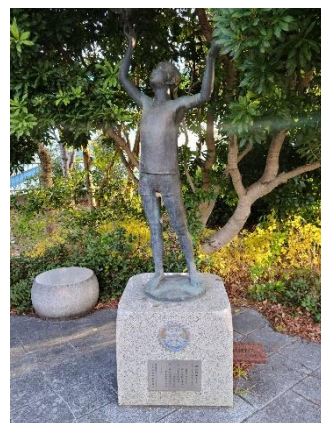
「**よろしければ**、私が代ってお話を伺いますが、いかがでしょうか」

「**大変恐縮ですが**、今回はご遠慮させていただきます」

「**ご足労をおかけして申し訳ございませんが**、〇〇までお越してください」

こんなふうに「クッション言葉」が付くことによって同じ情報を伝えるにしても、印象が大きく異なります。これらの言葉が会話の端々にちりばめられるだけで、響きの良い会話が生まれるでしょう。

ただし、必要以上に「クッション言葉」を多用すると、不快感を与えることもありますので、注意が必要です。



“THE FOUR-WAY TEST”（四つのテスト）少年の像⇒